

令和 5 年 6 月 30 日現在

機関番号：84603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K03086

研究課題名(和文) 叡尊・忍性による中世的救済ネットワークの研究

研究課題名(英文) A study of the medieval social relief network established by the monks Eison and Ninsho

研究代表者

吉澤 悟 (Yoshizawa, Satoru)

独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館・学芸部・部長

研究者番号：50393369

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：叡尊と忍性は鎌倉時代(13世紀)の西大寺系律宗の僧侶である。両者はハンセン病患者や貧窮者に対する組織的な救済活動の先駆者として有名である。彼らの活動はこれまで伝記類で説明されてきたが、本研究では考古資料や仏像断片、石造物等の物質資料をもとに組織の実態を究明するものである。特筆される成果として、忍性墓出土の大量の分骨容器の分析から、僧俗貴賤男女を問わず東北から近畿まで広がる人物が活動に与していることが判明した。これは造仏や石造塔建立などに組織される結衆のしくみと共通点があり、ひいては律宗寺院が全国に広がる基盤ともなったとみられ、救済と布教を同時に進める律宗の活動戦略の根幹であったと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

西大寺律宗の社会救済活動に関しては、これまで宗派内の史料に依拠した研究が進められてきたが、本研究では考古資料や美術作品などから記録に残らない人々の活動実態を把握することに努めた。仏の信仰、僧侶への信頼などを基盤に、様々な階層や地域の人々が結集し、活動に与していた様子がおよそ把握されたが、それは社会規範を制度化した今日の福祉事業のあり方と対照的である。本研究の視座は、社会福祉の通史的研究にも寄与するものと思われる。

研究成果の概要(英文)：Eison and Ninsho were priests of the Saidaiji-Ritsu sect during the Kamakura period (13th century). They are famous as pioneers of organized relief activities for leprosy patients and the poor. This study investigates the actual state of their organization based on archaeological materials, fragments of Buddhist statues, stone sculptures, and other materials. One of the most notable results of this study is the analysis of a large number of bone containers excavated from the Ninsho tombs, which revealed the presence of a wide range of individuals from the Tohoku to the Kinki region, regardless of whether they were monks, nobles, or men. This is a common feature of the Ketsuju system, which was organized for the construction of buddhist statues and stone pagodas, and is thought to have served as the basis for the spread of Ritsu sect temples throughout Japan, and was thought to have been the basis of the Ritsu sect's strategy of simultaneously promoting salvation and proselytizing.

研究分野：考古学

キーワード：忍性 骨蔵器 律宗 社会救済

1. 研究開始当初の背景

日本は世界に先駆けてハンセン病(癩病)患者に対して組織的な救済活動を行った歴史をもつ(鎌倉時代、約780年前)。この活動を推進したのは西大寺を中興し律宗の興隆につとめた叡尊(1200~1290)や弟子の忍性(1217~1303)であった。彼らの救済は『文殊師利般涅槃經』の教説を根拠にして、病人や貧民を文殊菩薩の化身とみて供養=救済をはかり、さらには授戒により罪の業=病の消滅を願う、精神性の強いものであったと言われる。こうした活動についてはすでに松尾剛次氏や細川涼一氏らの研究があり(松尾2004『忍性-慈悲二過ギター』ミネルヴァ書房、細川訳注1999『東洋文庫664感身学生記1』平凡社など)、社会救済や福祉事業の歴史的研究にもはやフロンティアは存在しないと思われる。しかし、叡尊や忍性の救済活動は『感身学生記』(叡尊の自伝)や『性公大徳譜』(忍性の伝記)等の記述をもとに再構成されたものであり、文字記録以外の遺品からの検証や情報収集は未開拓な状態である。特に救済活動のような「行動」には「物証」が残ることは少なく、モノからの研究が試みられる気運もなかった。しかし、救済活動は寺院の経営を支える人々、例えば仏師や鋳物師、大工、石工、さらには経済的、労働力的な支援者を巻き込むものであり、彼らに関わる様々な遺品を包括的に眺め、そこに関連性が見出せるならば、救済活動のネットワークの規模や広がりをより具体的に理解できるはずである。

平成28年夏、奈良国立博物館では『生誕800年記念特別展 忍性-救済に捧げた生涯-』と題した特別展を開催し、叡尊や忍性の事績にまつわる遺品や美術作品を紹介した。研究代表者はこの特別展の担当者として展示品や関連遺品を数多く調査し、その機縁をもって所蔵者から本研究に対する理解を得ることができた。さらに、後述するように、忍性骨蔵器のような重要作品にはエックス線CTスキャン装置や蛍光エックス線分析装置などによる科学的調査が必要であるが、幸い奈良国立博物館にはそうした分析装置が備わっている。タイミングや環境面で良い条件に恵まれており、本研究の実現性は高い位置にあると言える。

2. 研究の目的

本研究は、叡尊・忍性らによる社会救済活動や組織構成等について、現存する(伝記等の文献史料とは別の)物質資料から検討を行うものである。叡尊や忍性の活動は多岐にわたり、文献史研究が進んでいるものの、考古学的資料や仏像断片などの調査はまだ不十分である。本研究では、叡尊や忍性が手掛けた大事業と墳墓に焦点を絞り、その関連遺品や出土品の資料化や分析を積極的に進めることにする。そして、そこに浮かび上がる集団や人々の繋がりから、社会救済ネットワークはどのようなものだったかを検討・考察するものである。

3. 研究の方法

救済活動を担った集団は、叡尊や忍性と人的交流および彼らが実践した大規模事業への参画者が中心であったと想定される。そこで、本研究では、まず叡尊が救済活動の拠点とした般若寺(奈良市)に関わる遺品調査と、同寺の至近に残る救済施設「北山十八間戸」の検討を行うこととする。般若寺は、奈良の北辺、京都に向かう街道沿いに在り、都市からあふれた困窮者が住みつく立地にある。叡尊はここに丈六の文殊菩薩像を造り、救済のシンボルとした。叡尊の造営は特定のパトロンに依存せず、万人の喜捨に重きを置くとされており、この文殊菩薩像の造営も多くの人々の善意の結集であったと考えられる。現在、丈六文殊像は失われているが、眷属のものとしてされる木造の手首や太刀、獅子が踏んでいたとみられる石造蓮華座が寺に遺されている。その材質や彩色、造形などについて詳しい調査を行い、造営に参画した集団の特性を把握して行く。また、ハンセン病患者らが療養したとされる北山十八間戸に対して、先学による建築学的な検討に加えて、その機能性や立地、類似施設との比較などの検討を行い、その維持経営に必要とされる条件、経営規模などを考察する。

次に忍性墓出土品の調査・検討を行う。忍性の墓は、額安寺(大和郡山市)と竹林寺(生駒市)、極楽寺(鎌倉市)の3カ所に分かれて存在し、それぞれ約3mの巨大な五輪塔が建てられている。現在、3基すべての墓から出土した遺品が保存されているが、未だ正式な報告がなされていないものが多い。特に竹林寺の忍性墓からは、忍性本人の骨蔵器の他、彼に結縁して分骨を同所に納めた容器が約30点存在し、法名や所属を刻銘したものも多くみられる。これらを含む忍性墓関連遺品をすべて資料化し、忍性を取り巻く人脈の再構成とその広がりを把握する。

こうした遺品の資料化と分析を通じて、叡尊・忍性の救済活動のネットワークの具体像を考察に取り込む。

4 . 研究成果

本研究を通じて、般若寺の遺品や北山十八間戸の写真を含む調査資料や関連情報を収集することが出来、その造営にかなり高度な工人集団の関与が想定された。特に大工や木工、漆工、石工らの緊密な連携なくして般若寺周辺の造作は完成せず、その結集力の延長に救済活動も展開していたことが認識された。また、忍性墓出土の大量の骨蔵器の調査・分析から、僧俗貴賤男女を問わず東北から近畿まで幅広い範囲の人物が忍性と縁を結んでいたことが確認された。これは造仏や石造塔建立などに組織される結衆のしくみと深い関係が予想され、ひいては律宗寺院が全国に広がる基盤、救済と布教を同時に進める律宗の活動戦略などにまで視野を広げてこの組織網が評価されねばならないと認識した。中世の社会救済活動は、信仰と人脈の結集力で推進するものであり、社会規範を制度化した今日の福祉事業のあり方とは大きく異なっている。本研究の視座は、社会福祉の通史的研究にも寄与するものと思われる

なお、本研究では忍性墓出土品の写真や実測図資料が多く生産されており、今後、別途予算を確保してそれらをまとめた研究報告書を発行する予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 吉澤悟 鳥越俊行	4. 巻 23
2. 論文標題 大和・額安寺の忍性五輪塔に納められた骨蔵器群	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鹿園雑集	6. 最初と最後の頁 45-74
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 22
2. 論文標題 二つの忍性骨蔵器 - 大和・額安寺と同・竹林寺出土の銅製骨蔵器の調査 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 鹿園雑集	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 -
2. 論文標題 「證玄と忍性の骨蔵器 - 律僧の選んだ「舍利瓶」のかたち - 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『覚盛上人770年御忌 鎌倉時代の唐招提寺と戒律復興』	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉澤悟	4. 巻 20
2. 論文標題 行基墓誌断片を考える - 東大寺二月堂本尊光背断片との比較から - 」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『鹿園雑集』	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 吉澤悟
2. 発表標題 行基墓誌断片よりみた行基集団
3. 学会等名 ザ・グレート・ブッダ シンポジウム
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

奈良国立博物館リポジトリ https://narahaku.repo.nii.ac.jp/

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------